

●『素問』『靈樞』に続く古典全文解説！

[古典現代語訳シリーズ]

現代語訳◎宋本傷寒論

著者：劉 渡舟・姜 元安・生島 忍

体裁：A 5判 並製 834頁 定価：9,030円（本体8,600円＋税）

初めて実現した最良のテキストによる全文和訓と現代語訳



◎原文と和訓の上下2段組。

当社発行の『現代語訳◎黄帝内経素問』『現代語訳◎黄帝内経靈樞』と同じ「古典全文解説シリーズ」。

◎「宋本傷寒論」の全条文に対して[原文・和訓・注釈・現代語訳・解説]を付した総合的な傷寒論解説。

◎明の趙開美本（北京図書館所蔵）を底本として逐条的に解釈する。これまで省略されることの多かった「子目」（各篇の前におかれた開けよう条文の要約部分）を復活，宋本傷寒論の原型をそのまま復元。現代漢字によるテキストとして最も原本に近いテキスト。

◎著者は、日本の傷寒論研究に絶大な影響を与えた『中国傷寒論解説』（当社刊）の著者・劉渡舟名誉教授。中国における傷寒論研究の第一人者である。本書の和訓と中国語からの翻訳は、生島忍先生が行った。和訓は、日本古来からの和訓を参考にしながら、劉・姜先生の元訳と句読点にもとづいて独自に付している。

【組見本】

傷寒論卷第三
弁太陽病脈証并治中第六

漢 張仲景述
明 宋 晋 王叔和撰次
林 億校正
趙開美校刻
沈 淋同校

弁太陽病脈証并治中第六 合六十六法 方三十九首、并見太陽陽明合病法。

太陽病の脈証及び治法を弁別する中第六 合六十六法 方三十九首、并見太陽陽明合病法。

太陽病、項背強几几、無汗惡風、葛根湯主之。第一。七。

太陽陽明合病、必自利、葛根湯主之。第二。八。

太陽陽明合病、不利、但嘔者、葛根加半夏湯主之。第三。八。

太陽病、桂枝証、反下之、利不止、葛根黃芩瀉湯主之。第四。四。

太陽病、頭痛發熱、身疼、惡風、無汗而喘者、麻黃湯主之。第五。四。

太陽陽明合病、喘而胸滿、不可下、宜麻黃湯主之。第六。四。

太陽病、十日以去、脈浮細而嗜臥者、外已解。設胸滿痛、身小紫、胡湯。脉但浮者、与麻黃湯。第七。四。

① 目脈一脈とは目を閉じること、はっきりと見えないという意味で用いられている。

② 腸気重 腸気の鬱積が極めて激しいこと。

太陽病で、脈浮脈、汗が出ない、發熱、身体疼痛などの証があり、八九日を經てもよくならず、表証が依然として存在する場合、これは發汗法で治癒せねばならず、麻黄湯を用いるよい。服薬した後、表証にや改善がみられないのに、患者はいらや、視力の低下を訴えたり、ひどい場合は出血があり、出血したものを病証が治癒することがある。このような反応がおきるのは、腸氣が極めてひどく鬱積しているからで、第十六法、麻黄湯を用いる。

太陽病で、腸氣が形によってひどく鬱積せられた状態では麻黄湯を用いると、表証が少し残っているものは、汗が出、解表するかわりに、鼻血が出て解表する場合がある。

ご注文は FAX専用フリーダイヤルで 今すぐにFAX 0120-727-060